

令和4年度
日章学園
鹿児島育英館中学校
入学試験問題

国語

(時間 45 分)

(注 意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 問題は10ページあります。解答用紙は1枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、小学校名と氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具を置き、解答用紙だけをうら返しにして、机の上に置きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

もし、あなたがかさを持たずに学校に行って、帰り道、突然、ザーッと雨が降ってきたらどうしますか。

「しまったー！ かさを持ってくればよかった。でも、天気ヨホウで雨になるなんて、言っ
てなかったし……。ホントについてないよ」
そう思いながら、雨から逃げるように、駆け足で家まで帰るでしょう。

I、家に入ったら、「わー、ずぶぬれだ。早く拭かなければカゼひいちゃうよ」なんて言いながら、タオルで髪や顔を拭くのではないだろうか。親が家にいたら、「服がビショビショだよー、着替えなきゃ」と言って、着替えの服のヨウイを手伝ってもらいかもし
れません。

そこで、「どうして雨なんか降ったんだろう」「どうして私はかさを持っていかなかったんだろう」と、あれこれ考える人はいないはず
です。

実は、いじめが起きたときも、これとほとんど同じだと考えるべきです。

「どうして私がいじめに？」といくら考えても、結局、答えはわかりません。いじめのゲンインは一〇〇パーセント、いじめをする側に
あるのです。

II、「私っていじめにあってるんだ！」と気づいて、「なんとかしなくちゃ」と考えたら、何をすればよいのでしょうか。
することは、ふたつです。

まずは、雨から逃げるように、いじめから逃げ出すことです。いじめたいからすぐに逃げるのがむずかしいときは、とりあえ
ず、①「いじめのつらさ、悲しさ」から逃げるのです。

いじめについて、いったん考えるのをやめて、少しでも心が落ちつくようなことをしてみましよう。横になって眠れそうなら、眠るの
でもいいのです。いつも聴いている好きな音楽を聴く、というのでもいいと思います。

お菓子が好きな人なら、うちにあるお菓子を食べる。本棚にある好きなマンガを手にとってみる。なわとびが得意な人なら、庭に出て
一〇分ぐらい「ひとりなわとび大会」。もちろんゲームでも読書でも、ピアノを弾いたり犬と散歩に行ったりするのもオーケーです。

とにかく、何でもよいので、あまり考えずにできることを二〇分でも一時間でもやってみて、いったん、いじめというショックなでき
ごとから、心が離れるようにしてみるのです。

「でも、逃げるってよくないことじゃないの」

そう思う人もいるかもしれませんが、②「いじめのような緊急事態では、緊急の“逃げ”は少しも悪いことはありません。逃げて、自分

の心を休ませる。すべてはそれからです。

もちろん、「じゃ、お菓子作りでもしようかな」とクッキーの粉をこねているときでも、いじめられたことが頭をグルグルかけめぐらしてもいいんです。でも、そんなときでも、自分で自分に言い聞かせるのです。

「だいじょうぶ、いまは考えない、考えない」

そうやって、ショックを受けたあとの一時間か二時間を、なるべく「別のこと」をしながら過ごすだけで、心はかなり休息を取ることができるのです。そこで、「どうして私がいじめられるの？」と考えるすぎると、ただでさえ傷ついている心は、^③よけいに疲れて弱ってしまいます。

もちろん、そうやっていったん心が休まったからといって、それで問題解決、というわけではありません。……………**A**

「どうして私が？」「ひどい、許せない」という悲しみや怒りの感情は、またすぐにわいてくるでしょう。「学校に行くのがこわい」という気持ちになって、涙がポロポロこぼれたり、「うーっ」と声を出してうずくまったりすることもあると思います。……………**B**

いじめにあい、傷ついたことで、泣いたり落ち込んだり。……………**C**

泣くのは、あなたが弱いからではありません。理由もないのに、いじめられているからです。……………**D**

「まずは逃げよう、そして心を休めよう」。そう思っても、涙が出てきたり悲しくなったりしたときには、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と自分に言い聞かせながら、しばらくはそのままにしておきましょう。

無理して元気なふりをして、「平気、平気！」と動きまわったり、家族やほかの友だちとしゃべりすぎたりする、というのは、あまりおすすめできません。ただでさえ弱っている心が、もっと疲れてしまうからです。

III、涙が出てくるような最悪な気分の中でも、三〇分くらいいたら、ちょっとこんなことをしてみてください。

^④それは、「私はテレビのカメラマン」という気持ちになって、自分をカメラで撮影しているところを想像することです。

ちょっと離れたところから、カメラマンになって自分を撮影したら、どう見えるかな、と想像してみる。「もう二度と立ちなおれない！」「こんなひどい思いをしているのは世界で私だけ」と泣いている自分を、ちょっと他人の目で、「おお、泣いている、泣いている」と見てみるのです。

すると、悲しみとは別の感情もわいてきて、泣いている自分に声をかけたくなくなるはずですよ。

「二度と立ちなおれないなんて、そんなことないよ、きつと」

「たしか、去年、お父さんに怒られたときも、もう絶対、元氣になれない、って思ったんじゃないかって。でも、なんとかまた元氣に

なれたじゃない。だから、今回だって時間がたてば、今よりはマシになるんじゃないの？」

「自分が世界でいちばん不幸、ってホント？ たしかにいまはすごくひどい目にあってるけど、でもまだ私には、家族もいるし好きな本もあるし……。なんかかなるんじゃないの？」

傷ついているときに、まわりの友だちや家族に「時間がたてばなおる」とか「もっとたいへんな人がいる」と言われても素直に聞けなけれど、自分で自分にかけてよかったことばなら、けっこうすんなり心に入ってくるものです。

そして、絶対に忘れないでほしいのが、いじめで心が深く傷ついたとしても、自分のすべてが失われたり、自分のよいところまでがなくなったりするわけではない、ということです。

（香山リカ『いじめ』や「差別」をなくすためにできること）

問一 — 線部㉞㉟の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二

I

・

II

・

III

 に当てはまる語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア でも イ つまり ウ だから エ そして オ たとえば カ では キ なぜなら

問三 — 線部①『いじめのつらさ、悲しさ』から逃げるのです」について、本文中での逃げる方法として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好きなことをする。

イ 自分の得意なことをする。

ウ 規則正しい生活をする。

エ あまり考えずにできることをする。

問四 — 線部②「いじめのような緊急事態では、緊急の“逃げ”は少しも悪いことはありません」について、次の文は筆者がこのように考えた理由をまとめたものです。（①）は七字で、（②）は十三字で本文中から抜き出しなさい。（句読点も一字に含む）

・いじめの原因は（①）にあり、どんなに考えても答えは分からないので、それよりもまずは（②）ことが大切だから。

問五 ―線部③「傷ついている心は、よけいに疲れて弱ってしまいます」について、筆者はどのようにすると心が疲れて弱ると考えていますか。三つ簡潔にまとめなさい。

問六 次の一文は[A]、[D]のうち、どの段落のあとに入りますか。記号で答えなさい。

それは、人間としてごくあたりまえのことです。

問七 ―線部④「それは、『私はテレビのカメラマン』という気持ちになって、自分をカメラで撮影しているところを想像する」とありますが、なぜこのようなことをするのですか。「励ます」・「素直」の二語を使って、「自分をカメラで撮影しているところを想像すること、」に続くよう六十文字以内で書きなさい。

問八 次のうち本文の内容に当てはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア いじめにあい、泣いたり落ち込んだりするのは自分自身が弱いからである。
イ 傷ついているときこそ、周りの友人や家族の言葉を受け入れるべきである。
ウ 自分を客観的に見ることで、いじめの問題を解決することができる。
エ いじめられても、自分の良さが失われたりうばわれたりするわけではない。

二一 クラスの目標を決めるときに、「一致団結」と「初志貫徹」の二つが候補に挙がりました。あなたならば、どちらをクラスの目標に選びますか。あとの条件に従って作文しなさい。

【条件】

- 題名や名前は書かない。
- 二段落構成で書きなさい。
- 六行以上八行以内で書きなさい。
- 第一段落には、あなたがクラスの目標にふさわしいと考えたものを書きなさい。
- 第二段落には、その理由を四字熟語の意味もふまえて書きなさい。
- 原稿用紙の使い方に従って書きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

故郷の町は、東京よりもずっと西にあった。そのぶん **X** 夕暮れも、もう茜色あかねいろが空からほとんど消えかかったコロ⑦だった。

真一は小学校の校庭で、さかあがりの練習をしていた。あせっていた。悔しさと情けなさで泣きだしてしまいそうだった。

最初はクラスの半分近かった《できない組》が授業のたびに減っていき、気がつけば残り数人になっていた。その日いっしょに練習をしていた《できない組》の仲間も、一人また一人と「できたあ！」のカンセイとともに家に帰ってしまい、校庭に残ったのは真一だけだった。

下校のチャイムはどうに鳴っていた。暗くなった空と、町を囲んだ山なみとの境目が、もう見分けられない。北風にさらされた鉄棒を握り直すたびに、肩や背中が冷たさにゾクツと縮んだ。

掌や指の節にできたマメが、うずくように痛む。どうしても尻しりが鉄棒より上にいかない。たまに、今度はいいぞ、というところまで来ても、下腹を鉄棒に引き寄せることができず、脚が地面に落ちてしまう。何度やってもだめだ。負けず嫌いの気力も萎なえて、もういいやあ、と鉄棒の下にへたりこんでしまった。

《さかあがりの神様》は、そんな真一の前に姿を現したのだった。

体の大きな男だった。ボアの付いた紺色のナイロンジャンパーを着ていた。校庭には明かりがないので顔はわからなかったが、なにかな怒っているような雰囲気だった。

学校の用務員さんだ、と最初は思った。

真一はあわてて立ち上がり、半ズボンの尻についた砂を払いながら、^①「すぐ帰ります」と言った。

「逃げんでもええ」

しわがれた低い声が聞こえた瞬間、身がすくんだ。怖かった。目を上げて顔を確認することもできない。

「さかあがりの練習しよるんか」

おとな同士でしゃべるときのように、笑いのない声だった。真一は思わず「ごめんなさい」と答えたが、顎あごも口もこわばっていて、うまく動かなかった。上目遣いでおそろおそろ顔を見た。知らないひとだった。太い眉毛まゆげとギョロツとした目がいっしょにつり上がって、学校で一番おっかない山田先生よりずっと怖そうだった。

「でいいのか」と男はつづけた。怒られる、としか思えなかった。小さくうなずいたつもりだったが、男は声をさらに濁にごらせて言った。

「どっちな。できるんか、でいいのか」

「……できません」

泣きそうになった。こんなに怖いひとに会うのは初めてだった。おとなの男のひとに怒られるのも、初めて。それ以前に、おとなの男のひとと二人きりになったことも、ほとんどない。

真一は赤ん坊の頃に父親を病気で亡くしていた。母一人子一人の暮らしだった。親戚や近所の男のひとは皆、真一に話しかけるとときには優しい声をつくってくれた。その理由と、「不憫な子」の意味を真一が知るのは、ずっとあとになってからのことだ。

「怖がらんでええけえ、いっぺんやってみいや」

男は鉄棒に顎をしゃくった。逃げだしたくても、足が震えてしまっただけ動けない。助けを求めようにも校庭に人影はない。

「おじちゃんが見ちゃるけえ、やってみい」

鉄棒につかまった。腕のハバを調節する間もなく、地面を蹴り上げた。

今度もだめだった。腕も脚もくたくたに疲れていたし、男の視線が気になって、いままでの中でも一番ひどい出来だった。

「こりゃあ、ぜんぜんおえんのう」

男は、初めて笑った。笑ってもしわがれ声は変わらなかったが、つり上がっていた眉毛や目が人形劇の人形のように急に下がった。怒られずにすんだ。

ほっとして息をつくとき、怯えた気持ちと入れ替わるように、悔しさと恥ずかしさと、そして悲しさが胸に湧いてきた。

お父ちゃんがおらんけん——喉を迫り上がりかけた言い訳を、うつむいて押しとどめた。

父親のいない暮らしに負い目を感じていたわけではない。母親は簿記のシカクを持っていたので生活には困らなかったし、ものごとろつく前に亡くなったのが逆によかったのだらう、父親との思い出をたどって悲しくなることもなかった。

それでも、寂しさは、ある。ときどき不意打ちのように[Y]を刺す。父親に肩車してもらっている友だちを見かけたとき、父親のこぐ自転車に二人乗りする友だちに声をかけられたとき、いたずらして父親にびんたを張られた友だちに、赤く腫れた頬を触らせてもらったとき……。

さかあがりでも、そうだ。父親に手伝ってもらって練習したという友だちにならって、何日前、さかあがりのコーチを一度だけ母親

に頼んだ。Z、尻を持ち上げてもらおうにも、母親の細い腕では小太りの真一の体を支えきれない。地面に落ちる脚といっしょに母親まで尻餅しりもちをついてしまい、母親はまだがんばるつもりだったが、真一のほうが「もうええよ、危ないから」と止めたのだった。

睨まじ目が重くなった。いけない、と思ったとたん、涙②があふれた。歯を食いしばったすすり泣きは、やがて嗚咽おえつ交じりの涙に変わり、最後は鉄棒に目元を押しつけて、声をあげて泣いた。冷たい鉄棒に涙の温ぬくもりが滲しみていく。錆さびた鉄のにおいに、しよっぱさが溶けた。

「もういっぺん、やってみい」

男が言った。濁った声を、もう怖いとは感じなかった。一度泣いてしまえば、悲しさも恥ずかしさも消えて、残ったのは誰にぶつけていかかわらない悔しさだけだった。

「今度は脚を上げるときに『このやろう！』思うてやってみい。肘をもっと曲げて、脚④いうよりへソを鉄棒につけるつもりで、腕と腹に『くそつたれ！』いうて力を入れるんじゃ。目もつぶっとけ。そうしたら、できるわい」

真一は鉄棒を強く握りしめた。

もう一度——これで最後。

肘を深く折り曲げ、「このやろう！」と心の中で一声叫んで、脚④をハね上げた。へソをつける。腕と腹が痛い。目をつぶり、息を詰めて「くそつたれ！」と叫び声を奥歯で噛かみしめた。

あと少し。いいところまで来たが、これ以上、尻が上がらない。

そのときだった。

尻がフワッと軽くなった。

掌てのひらで支えてもらった——と思う間もなく、体の重心が手前に傾き、腰から上が勝手に動いた。世界が逆さに回った。自分でもなにが起きたのかわからないほどあっけなく、そしてきれいに、さかあがりは成功したのだ。

「できたじゃろうが」

男は初めて笑った。思ったより遠くにいた。手を伸ばして尻を支えるには距離がある。ということは自分の力で……いや、しかし、半ズボンの尻には、掌で押し上げてもらった感触がまだ残っていた。

「もういっぺんやってみい。体が忘れんよう、練習するんじゃ」

言われたとおり、何度も練習した。ずっと成功がつづいた。尻が鉄棒を越えるときに掌に支えられる、それも同じ。だが、成功して脚を地面についたあと、すぐに目を開けて確かめると、男はいつも鉄棒から離れたところで腕組みをして立っているのだった。

何度目だったろうか。初めて、掌に支えられることなくさかあがりに成功した。

「やったあ！」

思わず声をあげて男の姿を探した。

どこにもいなかった。

③ 神様だ、と思った。〈さかあがりの神様〉が助けてくれたのだ、と信じた。

それを確かめたくて、もう一度やってみた。だいじょうぶ。何度も繰り返した。できる。「このやろう！」と「くそったれ！」がなくとも、世界は気持ちいいぐらい簡単に逆さに回ってくれる。

なぜだろう、それは初めて体験したはずの感覚なのに、ずうっと昔に味わった心地よさが蘇^{よみがえ}ったような気がしてならなかった。

(重松 清「卒業ホームラン」より「さかあがりの神様」)

問一 ―線部㊦㊧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ―線部①「すぐ帰ります」とあるが、真一がそのように言った理由を答えなさい。

問三 この文章には次の文が抜けています。この文が入る場所として最も適切な場所を、文章中の[A]、[D]から選びなさい。

「もう一度うながされた。声がほんの少しだけ優しくなったような気がしたが、早くさかあがりをやらないと、また怖くなるかもしれない。」

問四 空欄 [X]・[Y]・[Z] について、それぞれに入る言葉として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

[X]	ア 浅い	イ 深い	ウ 早い	エ 遅い
[Y]	ア 水	イ 釘	ウ 胸	エ 油
[Z]	ア かし	イ だから	ウ そして	エ 例えば

問五 ―線部②「涙があふれた」とあるが、真一がそのようになった理由を説明している次の文の（Ⅰ）（Ⅱ）に当てはまる言葉として、最も適切な言葉を文章中から、それぞれ三文字で書き抜きなさい。

（真一の涙の理由） 「父親がいらない（Ⅰ）と父親の分まで頑張ろうと無理をする母親への（Ⅱ）が一気に思い出されたから。」

問六 ―線部③「神様だ、と思った」とあるが、真一が男のことをそのように思った理由を二つ答えなさい。

問七 この文章を通して真一の心情の移りかわりをまとめると次のようになる。（Ⅰ）（Ⅱ）に入る心情として、最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

焦り・情けなさ ↓（Ⅰ） ↓（Ⅱ） ↓安心 ↓悲しさ ↓（Ⅲ） ↓嬉しさ・心地よさ

ア 喜び イ 悔しさ ウ あきらめ エ 怒り オ 恐怖 カ 憎しみ

四 次の問いに答えなさい。

問一 次の同音異字・同訓異字について―線部の漢字として適切なものを後の語群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

【カイホウ】

- ① 体育館をカイホウする。 ② 緊張からカイホウされる。

【タイシヨウ】

- ③ 学生をタイシヨウにしたアンケート。 ④ 左右タイシヨウの建物。

- ⑤ タイシヨウ的な性格。

【ハカル】

- ⑥ 解決をハカル。 ⑦ 時間をハカル。 ⑧ 身長をハカル。 ⑨ 体重をハカル。

〔語群〕

ア 解放	イ 介抱	ウ 快方	エ 開放	オ 対称	カ 対償	キ 対象
ク 対照	ケ 計る	コ 測る	サ 図る	シ 量る	ス 謀る	

問二 次の①～③の各文の主語として、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

① 庭の花は雨が降りすぎたので枯れてしまいました。

② 雪の日に庭で兄が雪だるまを作った。

③ 今年は五年生になった妹もサッカーを始めた。

問三 次の①②の各文の―線部と言葉の働きが同じものとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

① 雪だるまを見ると、去年の冬休みが思い出される。

ア 寝坊して母に怒られる。

イ 兄から貰ったこの服はまだ着られる。

ウ 黒板の前で先生が教科書を読まれる。

エ 明日の天気が案じられる。

② この絵は写真のように鮮やかに描かれている。

ア どうか、明日の試合に勝てますように。

イ 今日の満月は太陽のように明るく空を照らしている。

ウ このケガの様子だと、明日のマラソン大会に出るのは難しいように思う。

エ 待ち合わせの時間に遅れないように、早起きをして準備した。